

「私たちのために苦しみを担ったお方」

イザヤ 52:13~53:12

2020. 4. 5 南与力町教会朝拝

序：受難週と世界の痛み

世界中がコロナウイルスによって大変なことになっています。日本、そして私たちが住んでいるこの高知も例外ではありません。今は世界全体に大きな災い、大きな痛みが襲っていると言えるでしょう。

そのような中で、私たちは今朝、受難週を迎えました。主イエスが味わわれた受難、御痛みを思い起こす、思い巡らす大切な期間です。世界に大きな痛みが襲う中で、私たちは主イエスの十字架の痛みを思い起こしたいと思います。それは意義深いことであり、大切なことです。

今お読みしました箇所は「受難の僕」と呼ばれています。そしてここに出てくる「受難の僕、主の僕」は、イエス・キリストの受難を預言しているものとしてキリスト教会において読まれてきたものです。

このイザヤの預言が語られた時代、神の民であるイスラエルは大きな痛みの中にありました。バビロン捕囚です。イスラエルはバビロンという大国によって滅ぼされ、多くの人が捕囚として連れていかれてしまったのです。52章14節では

「かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように／彼の姿は損なわれ、人とは見えず／もはや人の子の面影はない。」とありますが、この「あなた」というのはイスラエルの都「エルサレム」のことです。それは前のところを見るとわかります。52章1節

「奮い立て、奮い立て／力をまとえ、シオンよ。輝く衣をまとえ、聖なる都、エルサレムよ。」

また52章2節

「立ち上がって塵を払え、捕らわれのエルサレム。首の縄目を解け、捕らわれの娘シオンよ。」

さらに52章9節

「歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。」

エルサレムはこの時、捕らわれ、廃墟になっていたのです。それは罪に対する神の怒り、憤りによるものでした（イザヤ 51:17）。しかし、その廃墟となったエルサレムに良い知らせ、福音が伝えられるのです。52章7節

「いかに美しいことか／山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え／救いを告げ／あなたの神は王となられた、と／シオンに向かって呼ばれる。」

また9節から10節

「歓声をあげ、共に喜び歌え、エルサレムの廃墟よ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われた。主は聖なる御腕の力を／国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人が／わたしたちの神の救いを仰ぐ。」

エルサレムが贖われる。さらにそれは世界中の国々、すべての人が仰ぐような神の救いであると言われています。ではそのような救いはどのように成し遂げられるのでしょうか。それに答えるのが、続く「受難の僕の詩」なのです。

①主の僕の卑しい姿、人々からの軽蔑 (52:13-53:3)

「受難の僕」と言われますが、この箇所にはただ主の僕が受ける苦しみだけが記されているわけでありません。むしろその冒頭である 13 節にはこうあります。

「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。」

この主の僕は、最終的には、栄える。はるかに高く上げられるのです。しかしそこに至るまでに僕は多くの苦しみを経なければなりません。そのことが 14 節から語られていきます。

「かつて多くの人をおののかせたあなたの姿のように／彼の姿は損なわれ、人とは見えず／もはや人の子の面影はない。」

先ほど見ましたようにここで言われている「あなた」とはエルサレムのことです。バビロン捕囚に遭い、廃墟となったエルサレムを見た多くのひとはおののか、驚いたのです。それと同じようにこの僕の姿は損なわれ、もはや人の子の面影すらない。人間のように見えない。それほどひどい姿なのです。それゆえ 15 節では

「それほどに、彼は多くの民を驚かせる。彼を見て、王たちも口を閉ざす。だれも物語らなかつたことを見／一度も聞かされなかつたことを悟ったからだ。」とされています。

多くの諸国民が、そして王たちが彼を見て、驚き、口を閉ざす。言葉を失ってしまいます。それは「だれも物語らなかつたことを見／一度も聞かされなかつたことを悟ったから」です。

さらに 53 章 1 節では「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか」とあるように、ここで語られていることは容易には信じられないことなのです。さらに「主は御腕の力を誰に示されたことがあるか。」とも言われています。それはつまり、多くの人にとって力強い主の御腕が、その力が示されていない。この主の僕の弱々しい姿には神の御腕の力が示されていないように思われる、ということでしょう。

そしてこの僕がどのように生まれ、育ったのかが 2 節で描かれます。

「乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。」

彼が生まれてくるのは「乾いた地」、何の命も生み出せないような荒廃した世界です。しかしその「乾いた地に埋もれた根」のように、あるいはそこから生え出た「若枝」のように、この人は主の御前に育っていったのです。「若枝」とはメシアの象徴でもあります (イザヤ 11:1)。彼はメシアとして神様の御前で成長していきました。しかしその人には私たちが見入ってしまうような美しさや輝かしさはありません。私たちが好むような、望むような外見ではないのです。

そして 3 節では

「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。」とあります。

彼は人々から軽蔑され、見捨てられます。「多くの痛みを負い」とは原文では「痛みの人、悲しみの人」という言葉です。彼は「悲しみの人で、病を知っていました」。「病を知っている」とは単に知識として知っているということではなく、体験として知っているということです。彼自身が病を、その苦しみを経験し、知っているということです。しかし、そういう彼を私たちは「軽蔑し、無視していた (尊ばなかった)」と言われます。

②彼が担ったのは私たちの病、痛み、罪であった (53:4-6)

そして4節からはこう言われていきます。

「彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。」

先ほど彼は「多くの痛みを負い、病を知っている」と言われていましたが、彼が担ったのは実は「私たちの病」だった、彼が負ったのは「私たちの痛み、痛み、苦しみ」であった、ということです。しかし、私たちはそのことに気づかず、彼は「神の手にかかり、打たれたから、苦しめられているのだ」と考えていたのです。彼が罪を犯したから、その当然の報いとして神によって打たれ、裁きを受け、苦しんでいる。そのように思っていた、ということです。しかし実はそうではなかったのです。5節

「彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」

彼が、すなわちイエス・キリストが、あの十字架上で刺し貫かれ、打ち砕かれたのは、彼自身の罪によるものではありませんでした。そうではなく、「私たちの背きのゆえに」、「私たちの咎の故に」、彼は刺し貫かれ、打ち砕かれたのです。その原因は彼自身にではなく、私たちの罪にあったのです。そして「彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ」ました。本来私たちが受けなければならない懲らしめを、主の僕が、イエス・キリストが代わりに受けてくださいました。そのことによって私たちに平和が、神様との平和が与えられました。それは続く54章の10節で「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず／わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない／あなたを憐れむ主は言われる。」と言われている通りです。キリストが懲らしめを受けてくださったおかげで、そのような揺らぐことのない平和の中に、神様との平和の関係の中に私たちは入れられたのです。そして「彼の傷によって、わたしたちはいやされた」。傷によって癒されるというのは不思議な言い方です。普通、病がいやされるのは、薬や治療によってでしょう。しかしより根源的な私たちの病、すなわち罪という死に至る私たちの病は、彼があの十字架上で受けた傷によって、すでに癒されたのです。

そして6節ではよりはっきりとこう言われます。

「わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。」

最初の「わたしたちは」という言葉は原文では「わたしたちすべて、わたしたちは皆」という言葉です。罪とは私たちのうちの特定の誰かが犯すものではありません。私たち皆が罪を犯してきたのです。では罪とは何でしょうか。それは単に人間の法律、道徳律を破ることはありません。そうではなく、私たちは皆、羊のように、道を誤り、それぞれの方角に向かっていました。それがもう罪なのです。私たちの羊飼いである神様のもとからさまよい出し、自分の好き勝手な方向に向かっていく。それがもう神様の前には罪なのです。私たちの中でこのような罪を犯さなかった人は一人もいません。しかし神様はそのような私たち皆の罪をすべて、彼に、ご自分の僕に負わせられたのです。彼は私たちすべての者の罪を負わされた身代わりの小羊です。

③彼は物言わぬ小羊のように—その死と葬り (53:7-9)

しかし彼は文句ひとつ言いませんでした。7 節

「苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかつた。」

彼は屠り場へ連れていかれる小羊のように、ただ黙って、口を開きませんでした。キリストは確かに水を訴える裁判において、いくら人々から不利な証言をされようとも、口を開こうとはされませんでした (マタイ 27:14)。ただ黙々と十字架という自らの屠り場へと引かれていったのです。

そしてついにその命が絶たれます。8 節

「捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。」

彼の命が十字架上で絶たれた時、同じ時代の人々は誰も考えてはいませんでした。まさか「神の民 (自分たち) の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれた」とは。

そして 9 節

「彼は不法を働かず／その口に偽りもなかつたのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。」

彼自身は何の不法も暴虐も働いたことがありませんでした。その口で偽り、嘘を言ったこともなかつたのです。行いにおいても言葉においても罪は犯さなかつたのです。それには関わらず、「その墓は神に逆らう者 (罪人) と共にされ／富める者と共に葬られた。」マタイ福音書はイエスを墓に葬ったのがアリマタヤ出身のヨセフであり、彼は金持ち、富める者であった、と伝えています (マタイ 27:57)。その葬りにおいても預言は成就したのです。

④僕による主の御心の成就とその実り (53:10~12)

しかしなぜこの僕は口を開かず、文句ひとつ言わず、屠り場へと、十字架の死へと向かっていったのでしょうか。10 節にはこうあります。

「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。」

この人を打ち砕き、苦しめることを主が、神が望まれたのです。彼はそのことを知っていました。それゆえに「彼は自らを償いの献げ物とした」。彼は自らの命を罪を贖う供え物としてささげたのです。そのようにして彼は自ら、自発的に主の御心に従っていかれました。その結果、「子孫が末永く続くのを見る」と言われています。彼は死んで終わりではありません。自分の霊的な子孫が末永く生きていくのを見るのです。彼自身、死から復活し、永遠に生きるのです。そして「主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。」と言われます。彼の死と復活によって神の御心は成就しました。

そして 11 節

「彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。」

彼の苦しみの実りは、「多くの人が正しい者とされる」ということです。イスラエルの人々だけではありません。多くの国々の民が神様の前に義とされる、神様との正しい関係の中に入れらるのです。「わたしの正しい僕」が、多くの人の罪を自ら負うことによって成し遂げられるのです。そしてその僕自身、その苦しみの実りを見て、満足するのです。自らの苦しみは無駄ではなかった、と。

そして最後の 12 節

「それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし／彼は戦利品としておびたしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで／罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人の過ちを担い／背いた者のために執り成しをしたのは／この人であった。」

「戦利品」とは戦いの勝者に与えられるものです。この僕の生涯は言わば敗北者の生涯のようでした。見るべき面影もなく、輝かしさもなく、人から軽蔑され、見捨てられ、苦しみと痛みを負い、命を絶たれたのです。しかし、彼は復活し、最終的には勝利するのです。そして神様から多くの人を「戦利品」として与えられるのです。それは彼が自らの命を死に至るまで注ぎ出し、罪人の一人に数えられたからです。このお方、主の僕、イエス・キリストこそ、多くの人の過ちを担い、背いた者のために執り成しをなさった方です。

結論：

私たちはキリストによって贖われ、「キリストのもの」とされた多くの戦利品の一人です。私たちはもはや敵である罪と死の支配下にはなく、キリストの愛のご支配の中にあります。もちろん、地上にある限り、神の国に入るまでは、私たちになお苦しみがあります。共にうめき、苦しみ、忍耐しなければなりません。しかしその苦しみは決して死に至る、滅びに至るものではありません。なぜなら死に至る罪という病は、キリストが代わりに負ってくださったからです。私たちはすでにキリストの十字架の傷によって癒されたのです。神との揺るぐことのない平和の中に入れられました。わたしたちの罪を負って死に、復活して、今や神の右に座しておられるイエス・キリストが、今も私たちのために執り成してくださっているのです。私たちにとってこれほど心強いことはありません。パウロはローマ書 8 章 3 4 節～3 5 節で次のように語っています。

「だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

どのような艱難も苦しみも危険も、イエス・キリストの愛から私たちを引き離すことはできません。